主日礼拝説教「愛さないではいられない！」予稿

日本基督教団石神井教会　2022年9月11日

【旧約聖書日課】ホセア書　11章1～9節

1 まだ幼かったイスラエルをわたしは愛した。
　エジプトから彼を呼び出し、わが子とした。
2 わたしが彼らを呼び出したのに
　彼らはわたしから去って行き
　バアルに犠牲をささげ
　偶像に香をたいた。
3 エフライムの腕を支えて
　歩くことを教えたのは、わたしだ。
　しかし、わたしが彼らをいやしたことを
　彼らは知らなかった。
4 わたしは人間の綱、愛のきずなで彼らを導き
　彼らの顎から軛を取り去り
　身をかがめて食べさせた。
5 彼らはエジプトの地に帰ることもできず
　アッシリアが彼らの王となる。
　彼らが立ち帰ることを拒んだからだ。
6 剣は町々で荒れ狂い、たわ言を言う者を断ち
　たくらみのゆえに滅ぼす。
7 わが民はかたくなにわたしに背いている。
　たとえ彼らが天に向かって叫んでも
　助け起こされることは決してない。
8 ああ、エフライムよ
　お前を見捨てることができようか。
　イスラエルよ
　お前を引き渡すことができようか。
　アドマのようにお前を見捨て
　ツェボイムのようにすることができようか。
　わたしは激しく心を動かされ
　憐れみに胸を焼かれる。
9 わたしは、もはや怒りに燃えることなく
　エフライムを再び滅ぼすことはしない。
　わたしは神であり、人間ではない。
　お前たちのうちにあって聖なる者。
　怒りをもって臨みはしない。

【使徒書日課】コリントの信徒への手紙一　12章27～31節

27あなたがたはキリストの体であり、また、一人一人はその部分です。28神は、教会の中にいろいろな人をお立てになりました。第一に使徒、第二に預言者、第

三に教師、次に奇跡を行う者、その次に病気をいやす賜物を持つ者、援助する者、
管理する者、異言を語る者などです。29皆が使徒であろうか。皆が預言者であ
ろうか。皆が教師であろうか。皆が奇跡を行う者であろうか。30皆が病気をいやす
賜物を持っているだろうか。皆が異言を語るだろうか。皆がそれを解釈するだろ
うか。31あなたがたは、もっと大きな賜物を受けるよう熱心に努めなさい。
そこで、わたしはあなたがたに最高の道を教えます。

【福音書日課】マルコによる福音書　12章28～34節

28彼らの議論を聞いていた一人の律法学者が進み出、イエスが立派にお答えに
なったのを見て、尋ねた。「あらゆる掟のうちで、どれが第一でしょうか。」29
イエスはお答えになった。「第一の掟は、これである。『イスラエルよ、聞け、
わたしたちの神である主は、唯一の主である。30心を尽くし、精神を尽くし、思
いを尽くし、力を尽くして、あなたの神である主を愛しなさい。』31第二の掟は、
これである。『隣人を自分のように愛しなさい。』この二つにまさる掟はほかに
ない。」32律法学者はイエスに言った。「先生、おっしゃるとおりです。『神は
唯一である。ほかに神はない』とおっしゃったのは、本当です。33そして、『心
を尽くし、知恵を尽くし、力を尽くして神を愛し、また隣人を自分のように愛す
る』ということは、どんな焼き尽くす献げ物やいけにえよりも優れています。」
34イエスは律法学者が適切な答えをしたのを見て、「あなたは、神の国から遠く
ない」と言われた。もはや、あえて質問する者はなかった。

「神を愛し、隣人を愛する」【こども説教のために】

今日の福音書で、主イエスは、わたしたちが「旧約聖書」と呼ぶ、ユダヤ人の受け継いできた「聖書」の中から「申命記」と「レビ記」の御言葉を引用して、言われました。

「**イスラエルよ、聞け、わたしたちの神である主は、唯一の主である。心を尽くし、精神を尽くし、思いを尽くし、力を尽くして、あなたの神である主を愛しなさい**」（申命記 6:4 より）。

「**隣人を自分のように愛しなさい**」（レビ記 19:18 より）。

これらが第一の掟、第二の掟で、**この二つにまさる掟はほかにない**、とまでおっしゃいました。

それは、ユダヤ人の律法学者も同意することでした。今のユダヤ教徒の人たちも、きっと同意してくれることでしょう。

大切なことは、この二つの教えを、どのように行うことができるか、ということです。「神を愛するためには、〇〇をしなさい」、「隣人を愛するとは、〇〇をすることです」と教えられれば、そうすればよいのです。そのようなことは、「聖書」でも教えられています。他でもない主イエスは、それを、ご自身の生涯をかけて、ご自身の命を献げて、お示しになり、お教えくださったお方なのです。

もっと大きな賜物を

「聖書」の戒めを、「神を愛すること」と「隣人を自分のように愛すること」の二つに集約することは、主イエスより早く、ユダヤ教のラビ・ヒレルが示したことだったと言われます。しかし、それではあまりに漠然とし過ぎていると考えた人々がいたのかもしれません。続く時代のユダヤ教のラビたちは、「聖書」の戒めを、「613 の戒め（ミツヴァー）」にまとめて教えるようになりました。613 項目に箇条書きして、示したのです。

613 項目もあると言われると、それを守るのは大変だと思われる方もあるかもしれません。けれども、そのほとんどは、ユダヤ人として生まれれば幼い時から習慣として身に着けるようにされてきたことばかりです。使徒パウロは、自分が律法の戒めを守ることにおいては落ち度がないと考えていたと思われますが、それは、多くの真面目に生きてきたユダヤ人の感覚であったことでしょう。

けれども、パウロら初代教会の弟子たちは、主イエスの教えを伝え、主イエスの導きに従って生きることを教えるに際して、ユダヤ人のラビたちのように「613 の戒め」を示す方法を取りませんでした。ただ、主イエスがもっとも重要な掟として示された、あの二つの戒め、「主なる神を愛する」ことと、「隣人を自分のように愛する」こと、これを繰り返し示すことに徹したのです。それは、わたしたちの生きる土地が変わり、社会が変わり、次代が変わっていったとき、それぞれに置かれた状況の中で、主イエスに従って生きようとする者自身が、自ら考え、自ら判断して、具体的に「愛する」仕方を選び取って行かなければいけないことに気づいていたからかもしれません。

主イエスが弟子たちを直接指導してくださっていた時代が過ぎ、弟子たちが教会の責任を負うようになり、その活動が各地に広がっていったとき、そこには自ずと役割分担が必要になりました。パウロも、教会を組織として秩序立てていくことに、かなり心を砕いていたようです。「**あなたがたはキリストの体であり、また、一人ひとりはその部分です**」と、体のたとえを用いて教会のあり方を教えたのは、組織としての教会が、その組織ゆえにバラバラになってしまう恐れが生じていたからです。もちろん、組織として位置づけられた各自の役割は、貴いものに違いありません。それは、神が賜物として一人ひとりに与えてくださったものに基づいているからです。それでも、その賜物の違いゆえに、互いの間に溝が生じることがあるのです。

そのとき、パウロは、どうしても原点に戻って教えるしかなかったのでしょう。各自に与えられているそれぞれの賜物を認めながら、それよりももっと大きな賜物を思い起こさせるのです。「愛」という賜物です。すべての賜物は、「愛」という大きな賜物に根差してこそのものなのです。

愛は決して滅びない

「**あなたがたに最高の道を教えます**」と言って、パウロは、「愛の讃歌」と呼ばれる愛の教えを記しました（Ｉコリ 13 章)。

主イエスの直接の弟子ではなかったパウロもまた、使徒たちを通して、主イエスの「愛の教え」を最も重要なこととして受け継いでいたのでしょう。十二弟子たちは、主イエスと三年間の生活を共にすることで、ただ教えとしてだけでなく、実践として、「愛する」とはどういうことかを、主イエスから叩き込まれていました。パウロは、そのような経験をできませんでしたから、ある程度、「愛とは何か」を問い、思索する必要がありました。その結実が、ここに記された「愛の讃歌」だと言ってもよいでしょう。

この「愛の讃歌」（Ｉコリ 13 章）までの箇所が、今日の聖書日課（使徒書日課）に定められていましたが、朗読は省略しました。もちろん、必要ないからではありません。「**最高の道を教えます**」と言って始めた「愛の讃歌」の章を、皆さんには、朗読を聞かなくても思い起こしていただきたかったからです。パウロが渾身の思いを込めて記した「愛の章」です。教会の現実を見て「**愛がなければ…無に等しい**」、「**愛がなければ…何の益もない**」と繰り返さなければいけなかったパウロが、それでも、「**愛は決して滅びない**」、「**愛…は、いつまでも残る**」と告げずにいられなかった「愛の章」です。

パウロは、愛が失われる現実を見ていました。「愛の教え」を「最も重要な掟」とされた主イエスに従う者たちの教会で、愛が失われていく現実を見ていました。「神を愛する」と言いながら、「隣人を愛する」こと、「兄弟を愛すること」を疎かにして平気な姿を見て、悲しみを深めたのは、パウロだけではなかったはずです。

「隣人を自分のように愛す」ことができないのです。「自分を愛す」ことに一所懸命で、「隣人を愛す」ことに思いが至らないのです。いいえ、本当には、「自分を愛す」ことができずにもがき苦しんでいて、「隣人を愛す」べきところから離れていようとしている、というのが、現実の姿なのかもしれません。「自分を愛す」ことがわからず、「隣人を愛す」こともできないのです。

けれども、神は、その「自分」を愛してくださっているのです。主イエスは、そのような「自分を愛す」ことがわからない弟子たちを、愛してくださったのです。愛された者だけが、「自分を愛し、隣人を愛す」ことができるようになるからだと、主はご存じでした。

そうであればこそ、「**愛は決して滅びない**」のです。「**愛は、いつまでも残る**」のです。わたしを愛してくださるお方の前に、今日も、わたしは招かれ、主の愛する人々を通して、わたしは、愛されています。あなたも、愛されています。「愛」に生きるほか、わたしたちの生きる道はないのです。